

BOOK Review

トップジャーナルへの掲載を叶える

ケースレポート執筆法

評者

廣澤 孝信 獨協医科大学総合診療医学講師

臨床のベッドサイドにはさまざまな学びがあります。しかし多くの場合、日常診療の多忙さから学術的なアウトプットとしての集合知よりも、無意識も含む現場レベルの経験として蓄積される場合が多いのではないのでしょうか。ケースレポート（症例報告）のエビデンスレベルは必ずしも高くはありません。また、多忙な臨床業務の合間にアウトプットとして形にするのは決して容易なことではないでしょう。しかし本書でも述べられている通り、ケースレポートには執筆を通じて疾患の理解を深め、自らの臨床能力を高められる意義があります。アクセプトされれば学びを読者と共有でき、報告した症例の重要性を再認識させてくれることでしょう。

私は、大学の総合診療科に所属する医師として、医学生から後輩、同僚までさまざまなレベルの方々の相談を受けたり指導したりする立場にあり、ケースレポートの執筆や発表もコラボレーションしてきました。こうした経験から、ケースレポートを書くための着想を得る時点から、執筆、投稿、受理までの全体の流れを示して伝える難しさを感じていました。その全体像を見事に示してくれるのが本書です。例えば、臨床経験と執筆経験を「2×2」で図式化して、執筆スケジュールを例示した図をはじめ、数々の掲載図によって、頭で漠然と考えている内容が明快に図式化・言語化されるので、とても役に立ちます。

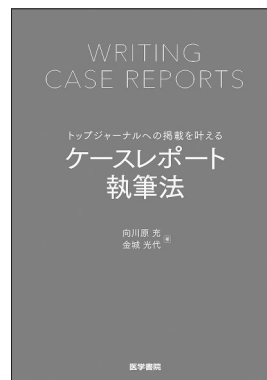
ケースレポートの執筆に関連した文献検索の仕方や、査読中や投稿後の振る舞いについても触れられており、著者の先生方のこれまでの経験や息遣いを紙面から学ぶことができます。本書内でもケースレポートを軸に、日常臨床で陥りがちなバイアスとして「冷たい認知」と「熱い認知」が

解説されています。著者の科学者としてのクールな視点と臨床医としてのホットな視点が同居していることを、本書全体から読み取ることができます。

現場の生きた学びをケースレポートに吹き込む方法も示してくれます。五感を駆使したベッドサイドでの学びをどう抽出するか、そして執筆者と読者の学びの共通項をいかに具現化するかが明快に述べられています。学びの言語化は、近年精度の向上が著しい人工知能（AI）でも代替は依然として難しいとされます。五感を駆使した学びの抽出は、ベッドサイドで日々診療を行う医療者だからこそできることであり、言語化の意義は高いと考えます。

本書を読むことで、ケースレポートの候補を選ぶ際に陥りがちな、稀少性を求めてしまう思い込みから解き放ってくれます。「稀少すぎず、ありきたりすぎず」とは言い得て妙の表現であり、これこそケースレポートとして取り上げる本質だと感じます。こうした珠玉の文言がケースレポートを執筆しようとする私たちの心理的なハードルを下げてくれるのです。

本書は初学者から指導医まで幅広い読者層に役に立つ実践的な書です。症例報告の構想から執筆、投稿まで、また一読者として症例報告を読む上でも本書を傍らに置いておけば、より俯瞰した視点を持ってケースレポートに向き合えるでしょう。本書は、日々のベッドサイドから得られる学びを、より一般化したクリニカル・パールとして共有できないか探してみたいと思わせてくれます。トップジャーナルへの投稿に限らずとも、ケースレポートの執筆に興味のある方、現在執筆中の方、既に執筆経験が十分にある方にも必見です。



向川原 充、金城 光代 著

A5/216頁/2023年/定価3,520円(本体3,200円+税10%) / ISBN978-4-260-05018-0 / 医学書院刊